

(3) 春まき小麦のムギキモグリバエ

令和3年は、上川地方を主体に春まき小麦のムギキモグリバエによる被害が多発した。被害は特に、春まき小麦と秋まき小麦が混在している地域で多い傾向があった。本種は年2～3回発生し、秋季に成虫が秋まき小麦等へ移動し、幼虫態で越冬する。令和2年秋季は高温に経過したため秋まき小麦での3回目成虫が多く、越冬幼虫の密度が高くなったものと推測される。本種の成虫は通常5月下旬に初発するが、春季が高温に経過した令和3年は、成虫初発が平年よりやや早い5月中下旬となり加害開始もやや早まったと考えられ、春まき小麦の生育初期から加害を受けやすかったものと考えられる。令和3年も秋季が高温傾向であったため越冬密度は高いものと推察されることから、次年度も注意が必要である。

本種による茎の被害症状は、加害時の茎の生育ステージによって異なり、加害時期が早い順に、新葉が抽出しないで枯死する「茎芯枯れ」、穂ばらみ状態で出穂が停止する「出すくみ(出穂不能)」、出穂前の穂を食害されることによる「傷穂」、出穂時に下部の茎内を食害されることによる「白穂」などがある。本種の被害として認識されやすいのは白穂、傷穂、出すくみであるが、これらは被害茎の穂の被害にとどまるため、むしろ被害として認識されにくい生育初期被害の方が収量に与える影響の大きさでは重要である。生育初期の主茎被害で分げつ数が激増する「異常分げつ」による無効茎増加と、出穂時期が遅くなる「遅れ穂」の増加は、深刻な減収や品質低下被害を引き起こす。

春まき小麦における防除対策として、早期播種に努め、5月下旬から6葉期頃まで2～3回程度の薬剤の茎葉散布を実施する。特に春季が高温に経過した場合は本種成虫の発生状況を踏まえ、初期主茎被害を防止するため1回目防除が遅れないように注意する。また、春まき・秋まき小麦の混在地域では、秋まき小麦の早まきが本種の越冬密度を高めて翌年の春まき小麦の被害を助長するため、秋まき小麦の適期播種に努める。



写真 ムギキモグリバエによる被害(左、中 中央農試 下間 原図、右 中央農試 武澤 原図)